

## 釈迦魂と提婆魂

### 提婆達多

釈尊の周囲には常に仏敵提婆がついていました。これは面白いことだと思えます。提婆達多は斛飯王の子でありまして、阿難尊者の兄であり、釈尊のためには従弟にあたる人であります。出家して仏のお弟子となりまして、身に三十相（仏は三十二相）を得、六万の法蔵を誦し得たと言いますから優れた才のあった人と見えます。しかし利養の心が強く、敵害心が強かったと見えます。他の尊者たちが神通を得ているのに、彼はどうしても得ることが出来ません。そこで世尊に教えを乞いましたが、逆悪をおこす風が見えますので、三学を勧められて、神通の法を教えられませぬ。そこで去つて、僑陳如、乃至五百の上座について教えを乞いましたが、仏のみ心を知っているので教えません。そこで十力迦葉波に詣り教えを乞いました。彼は仏の聖意を知らないので神通の法を教えたと言います。出曜経には、彼の弟、阿難尊者について教を受けたと出てをります。悪逆の心を持つものには人が遠慮します。遠ざけられるから更に反逆心を増長する提婆の心を理解することが出来ます。

彼は調達と言ひ、又は天熱とよばれます。なぜ天熱というかと言えば、彼が生れる時、諸天は彼が後に三逆罪を行うて仏教を破壊することを知つて心悩み、熱を生じたというのであります。彼はすでに生れながらにして逆悪の存在だったようであります。

悉多太子十二歳の時、五百の童子たちが各、自己の園内で遊んでいました。時に群雁が天高く飛行しました。提婆は弓をもつてその一雁を対止めましたが、矢を受けた雁は太子の園に落ちて来ました。太子は矢をぬいてその傷を治療してやられました。提婆はそれを求めましたが太子は与えられません。これが怨を買つた最初であつたとも言われます。

彼は三逆罪を行える者として有名であります。一つには和合僧を破りました。和合僧を破るとは仏の教団の和合を破ることであります。高慢なる彼は仏弟子をそれぞれ、仏の威光にならない反逆して五百の弟子を得ました。ところが、その弟子たちをとりもどされてしまったので悪心を起して大石を抛つて、仏足より血を流しました。これ五逆中の出仏身血であります。第三には華色比丘尼が之を見て彼を叱りましたので拳を以つて尼を殺しました。これが即ち殺阿羅漢であります。以上の破和合僧、出仏身血、殺阿羅漢を三逆というのであります。彼は更に悪心を起し毒を爪中に入れ仏を礼拝する時、仏を傷つけんとしましたが、未だ到らざるに大地が自然に破裂して地獄に墮ちたと伝えられます。

その外、仏の本生譚をよみますと、釈尊が鹿である時は提婆は獅子と言つた具合に、常につきまとうように書かれてあります。

### 釈迦魂

キリストにはユダがおり、釈尊には提婆と、必ず悪逆の人が聖者にだつてついでいたようであります。

静かに私どもの心を内観致します時に、釈尊の聖なるみ心にひかれて、菩薩魂に生きようとする願があると共に、人を呪い、人を悪み、害心を起して一步も人にひけを取るまいとする提婆の心を持つて知っていることを知ります。釈尊の心は万人を我が子と見、我が兄弟と見て、一切衆生の幸福のためには、一切を布施し、遂には命すら捧げて行こうとする態度であります。大無量寿経には、「我無量劫に於いて、大施主となりて、普く諸の貧苦を濟はずんば正覺を成ぜじ。」と誓われ、或は又「不可思議兆載永劫に於いて、菩薩の無量の徳行を積植し、欲覺、瞋覺、害覺を生せず、欲想、瞋想、害想を起さず、……忍力成就して衆苦を計せず。少欲知足にして貪、恚、痴無く、三昧常寂にして智慧無碍なり。」とあります。仏の心は静かな智慧に覺めてをり、貪欲の心や瞋恚の心や、人をやつつけてやろうとする苦心などありません。唯大慈悲に生きて、一切衆生を濟おうとする心であります。されば釈尊には憎むべき敵とてもなく、捨つべき衆生とてはありません。智慧によりて真如法性を覺了し、慈悲によつて一切衆生を利益しようとするのが釈迦魂であります。

### 提婆魂

提婆魂の根底は無明であります。そしてそれはやがて、食欲の心となります。地位を名譽を物質を異性を貪ろうとする心であります。もしこの一つでもが他によつて虐げられ禍せられたと見るや、たちまち真赤に血相變えて瞋恚の炎に燃え上り、復讐<sup>2</sup>せずにはおかないという害想を起します。而してそれが決して悪いことではなくて、当然のことだと考えます。

先日本部の近所では旅団の副官大尉の夫人がお氣の毒にも殺害せられました。新聞紙に出ていましたから御存じのことと思いますが、大尉が福山で中隊長の時に部下であつた人であり、就職口を探すために御厄介になつていた最中で、奥さんが蓄音器を下でかけよと言われたのが癪にさわつて殺したとか言つたそうですが、恩を仇でかえずとはこのことであります。提婆魂の特徴は、如何に悪逆を行つても、その時には自分は決して悪人ではないことであります。

### 勝利

我々がこの提婆魂で一ぱいになつてゐる時には、勝利とは相手を腹の癒えるほどやつつけてやることであります。しかしそれが眞の勝利でありましようか。

釈迦魂は悪逆の刃を少しも恐れぬ心でありますが、しかし相手を害する心を勝利とは考えない、ふまれてもたたかかれても起つて正しい道を歩みきろうとする、精進の忍従の心であります。もつとも弱虫が胸に愚痴を一ぱい抱きつつも、弱虫なるが故に、震うて手出しをしようしないのとは違います。眞に強いが故に、道に生きるが故に、大愛が動くが故に害せないのであります。釈尊の前生物語には、時には餓ゑた虎に体を食わせた話すらあります。

提婆の心は一人の幸福のために、万人を殺すも厭はぬ心であり、釈尊の大悲は、万人のために己れ一人を殺すも厭はぬ心であります。

### 泥と蓮華

提婆の中から釈尊が誕生します。

しかし釈尊の中から提婆は生れません。

よく仏のことを蓮華に譬えるのは、仏は煩惱の泥から生れて、煩惱にそまぬからであります。泥から蓮華が出ても泥に自慢は出来ないように、悪逆提婆の中から釈尊が顕われても、悪逆をほめるわけには行きません。

提婆は釈尊から血を流し、阿羅漢を殺すことが出来ました。そのように、凶悪の手は時に罪なき善良を虐げることにも出来、殺すことも出来ます。しかしそれだからとて、釈尊の尊さには指一本加えることが出来ず、その徳を寸毫も傷つけることは出来ません。

凶悪な提婆魂はそれ自体が破滅であります。釈迦魂は永遠であります。一人の釈迦魂の把持者はたおされても、きつと継承者が出て来ます。これは古来の歴史がはつきりと証明しています。生命を継ぐとはこの永遠なる魂を我の上に発見することです。あります。一人の法然上人、一人の親鸞聖人を流罪にすることによって念仏の火は消えませんが。一人の松蔭先生を殺し、一人の山陽先生が死んでも維新の大業を妨げることが出来なかつたように。

### 恐るべきもの

私どもは凡夫であります。凡夫は悪逆なる提婆魂のおしよせることを恐れます。しかしそれが真に恐るべきものでありましようか。釈尊は提婆によって光こそ増せ、決して一物をも失っていません。せめよせる提婆こそよい試練であります。提婆によつて滅ぶものであつたならば、ほんとのものではなかつたはずです。キリストはユダによつて十字架にかかり、日蓮は法難によつて佐渡に流されましたが、どちらもそれによつて滅ぶかわりに、それによつて、永遠なるものをいよいよ發揮しました。と言つて提婆をほめるわけには行きませんが、如何なる悪逆によつても亡ばないのが釈迦魂であることがわかれば結構です。

恐るべきは提婆ではなくて、自分の中に何もものもないことあります。信念の人が強いのは、この意味がはつきりわかつていて、自分が永遠不滅の大道と一体であることを信ずるからであります。

提婆魂に立つた時、大きな声をはりあげ、暴力を振るい、権力をたのみ、相手を何かの意味でたおそうとします。こうした勝利の後には、必ず底なき悲哀と、無価値なる寂しさのみが残ります。後悔と自暴自棄は提婆につきまとう影であります。彼が地獄におつるのも当然であります。

釈迦魂は内に真実に根ざす充実を持ちつづけて、外にこの提婆魂による苦悩を超克しつつ、常に戦なき世界への歩みをつづけます。釈迦魂は過去に愚痴をもたず、未来

に不安を抱かず、善による福を求める心をすて、真理に対する求道合掌に生き、唯大法が蹂躪ふみにじられる時には生命をすても戦つてゆきます。

自己の生命よりも大法を尊びます。人は人であるが故に尊いのでなくて、それが尊きものにつながるが故に尊いのであります。釈迦魂につきものは生きることのよろこびと水火も辞せぬ力とであります。

### 提婆の成仏

法華経第五巻に提婆達多品というのがあります。この中には有名な、八歳の龍王の女が文殊菩薩の化導によつて、南方無垢世界に到つて、宝蓮華に坐して仏陀となり三十二相、八十種好の相を具し、諸の衆生に妙法を演説することが説いてあります。この経では女人でも子供でも、畜生でも一如平等に仏陀たり得ることを説かれたのであります。この品の初めに釈尊はこんなことを物語つていられます。

「自分は過去に於いて世の国王と生れたが、真理を求めて肉身の快樂をかえりみず、鐘をついて四方に告げた。

「真理を持つている者は誰であるか。もし自分のために教えを説いてくれるならば、身を奴僕しもべにして仕えるであろう。」

時に阿私仙人が叫んで言うには  
「私は微妙な教えを持つている。それは世に稀なものであるが、もし能く修行すれば、汝のために私はそれを説くであろう。」と。

そこで私はこの仙人の言葉に従い、直ちに彼に随順して、果実草果をとり、心に妙なる真理を求めつつ彼を恭敬した。私はいささかの解怠をも感ずることなく、その教えを受けて遂に仏陀となつたのである。

「汝等よ、その時の王とは、私のことである。又その阿私仙人とは、即ち提婆達多のことである。私は提婆によつて仏陀となつた。自分が無上正覚を成就して仏陀となり、広く生類を教化するのは提婆の善い導きによるのである。提婆は我が善知識である。」

汝等よ、提婆は今三逆罪によつて地獄にあるも、今後多くの時を過ぎて仏陀となり、号を天王と言ひ、世界を大道と言ふ。天王仏は久しく世にあつて広く微妙の法を説かれるが、無量の生類は心の自由を得、覚りの心をおこし、真実道を求めて聖位に上るであろう。」

と説かれてあります。

この説法こそ誠に釈尊魂の顕現ではありますまいか。少くとも提婆に対する三つの見方があります。

- 一、提婆は悪むべき敵である。
- 二、提婆は気の寿な哀れな奴である。
- 三、提婆は我が善知識である。

一の如く考えるのを凡夫のおこす提婆魂とすれば、二は自分を独善的に高く買つた二乗の人の心であり、三は一切を尊重する菩薩魂即ち釈迦魂でなければならぬ。生きてゐる草木にとつては、寒い冬の日も、暑い夏の日も、なくてならぬ大切な縁である。仏に悪逆をのみ行ふ提婆をよき善知識と感じ、やがて大道世界の天王如来になる記別を与えられた釈尊のみ心の広さを思わないではいられませぬ。

#### 念仏の世界で

大地の上は永遠に釈迦魂と提婆魂のもつれであります。提婆魂からの一切の刺激を受け取らないで生きることが出来ませぬ。外からのそれを受け取りつつ如何に生きるかが残された問題であります。況んや我々自身が提婆魂の持ち主であることを知つた時、我等は先ず私の内なる悪逆心をどうするかが一大問題であります。

聖人が愚禿と言われたのは、この提婆魂を仏心によつて見つめられたからではありませんまいか、念仏の心は我等の上に君臨する釈迦魂ではありますまいか。如来心が悪逆心に火づいた時、そこに救いが成就されます。

提婆が成仏出来るように、如何なる煩惱も救われねばなりません。絶対他力の念仏の中で、この一切の問題が解決するではありませんまいか。